

# 建築ポート

2013  
No. 09

編集協力  
**Archi+Aid**  
Relief and Recovery by Architects  
for Tohoku Earthquake and Tsunami

建築のメイキングマガジン

建築家が  
挑む

# 未来の まぢらぐらり

ポスト3・11のソーシャル・アーキテクチャ

Essay

小野田泰明

浜の復興最前線

小嶋一浩 福屋粧子

塚本由晴 貝島桃代

渡辺真理 下吹越武人

ヨコミノマコト 佐藤光彦

中田千彦 槻橋修 他

ランドスケープへのまなざし

鼎談 中井祐×平野勝也×山崎亮

対談 宮城俊作×長谷川浩己

復興とプロポーザル

乾久美子 高橋一平

阿部仁史 八重樫直人

平田晃久 TeMaLi

コミュニティとみんなの家

対談 伊東豊雄×山崎亮

山本理顕 SANAA

乾久美子 藤本壮介 平田晃久

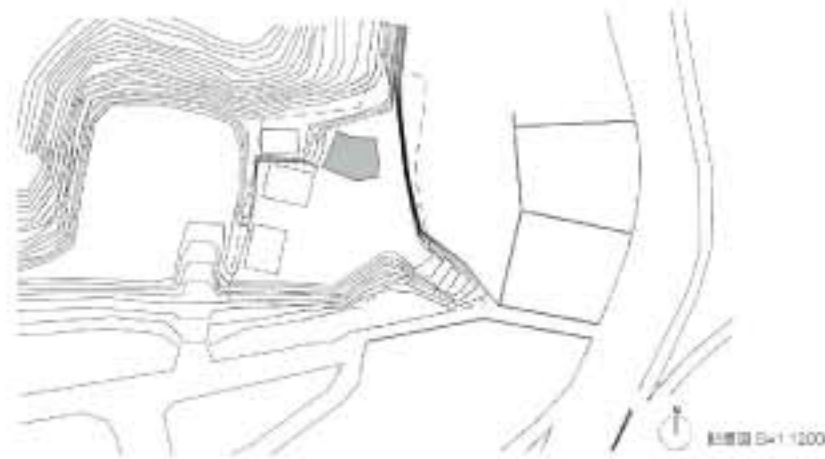
大西麻貴

インタビュー 坂茂

視点 コミュニティアーキテクトは必要か?

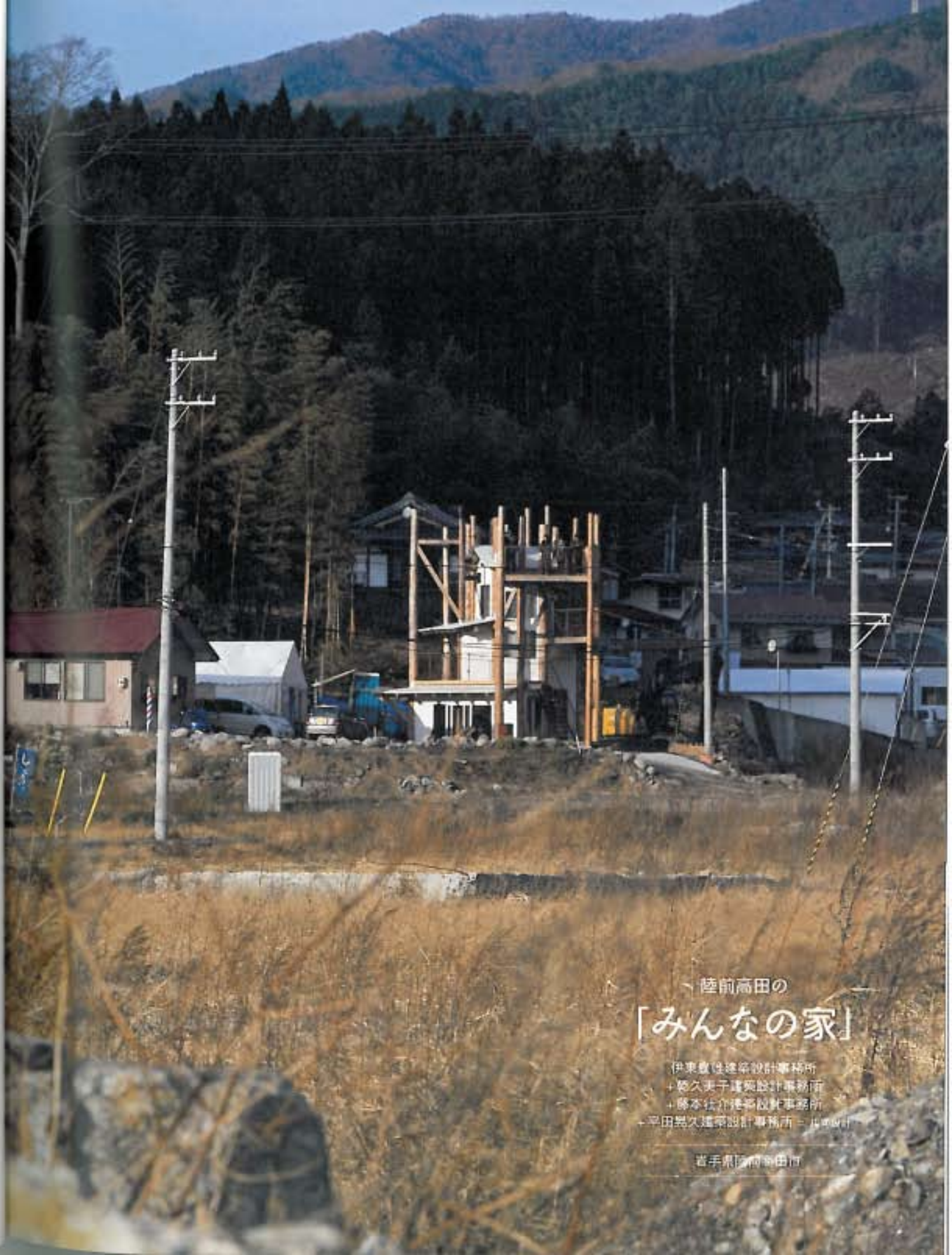


右側/南側の低平地より見る。建築が押し寄せた世界の敷地に立つ。開放感には多くの建築家も、よ/北側より見る。家を建てて立ち始めた市民の移り住み大団円として利用している。



「ここに、建築は、可能か」。2012年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展で、そのテーマを掲げた日本館が金獅子賞を受賞した。コミッションナーを務めた伊東豊雄氏が、「近代の『家』の意味を問い直す試み」として、みんなの家」を位置付け、梶久美子、藤本壮介、平田晃久の3氏を参加建築家として招いた。写真家として参加する高田直成氏は陸前高田市出身で、実家と実母を震災で失ったという。建築家たちの思考や議論、建設のプロセスを総合して注目を集めた陸前高田の「みんなの家」が、ついに完成した。個性の異なる建築家が、共にひとつのモノをつくり上げることはどのような経

験だったのだろうか。  
敷地は、津波被害で更地となってしまう荒野とその向こうに海を望む場所にある。  
「コンテラクトが希薄な」荒れ地とした中に何かをつくるべき目は何まっせまいますが、建築家の仲間がいたこと、菅原みき子さんやその仲間のおかげでこの地点に連れていってもらった、希少な体験だったと思います」と乾氏は言う。  
菅原氏は、「みんなの家」をつくるにあたり、住民の中でリーダーシップを取ってきた人物だ。5カ月に及ぶ避難所生活から仮設住宅に移動したものの、お客さんを迎え入れる空間がそこにはなかった。また震災以降、共に生活してきた仲間が個々の仮設に離散してしまい「寂しい」という声も上がっていたのだという。「散歩がてらにほっときて、お茶をのみながら話ができる場所」を必要としていた。そして、伊東氏らと旧会うことになる。当初は自らが住まう仮設住宅の敷地での建設も検討していたが、他の仮設住宅からもアクセスしやすい現在の場所を選んだ。  
「みんなの家でやったことは、住民の方がたのしさをすくいと上げてかたちに落とし込んでいくことでした。それは、ヒロイックな今までの建築のあり方とは違い、そこで言われていることを増幅してかたちにしていくことにクリエイティブティがあるのだと思います。建築家がやるべきことが変わってきたというのが、みんなの家を体験して分かってきたことです」と乾氏は言う。複数の建築家だけでデザインを収めさせていくことはもろしかしたら難しかったかもしれない。しかし、利用者が介入することが、複数の建築家の個性を創意的に融合したのかもしれない。  
津波を被って立ち枯れた森林がもったいないという住民の声に耳を貸して、隣近所の丸太



## 陸前高田の「みんなの家」

伊東豊雄建築設計事務所  
+ 梶久美子建築設計事務所  
+ 藤本壮介建築設計事務所  
+ 平田晃久建築設計事務所 = 共同制作

岩手県陸前高田市



石舟ノ森の丘陵地より見る。震災が押し寄せた海岸の敷地に立つ。震災前には多くの民が、上ノ丘より見る。崖を削って立ち上った坂元の形を丸太柱として利用している。



「ここに、建築は、可成り、2012年ブ・ネチア・ピエンナリー国際建築展で、そのテーマを掲げた日本館が金獅子賞を受賞した。コミッションナーを務めた伊東豊雄氏が、「近代の『別』の意味を問い直す」とする試みとして、「みんなの家」を位置付け、佐久美子、藤木壮介、平田晃久の3氏を参加建築家として起用した。写真家として参加する高山直哉氏は陸奥高田市の出身で、実家と実母を震災で失ったという。建築家たちの思考や議論、建設のプロセスを紹介して注目を集めた陸奥高田の「みんなの家」が、ついに完成した。個性の異なる建築家が、共にひとつのモノをつくり上げることはどのような経

緯だったのだろうか。

敷地は、津波被害で荒地となつてしまった荒野とその向こうに海を望む場所にある。

「ロングアクトがあるような」邸院とした中に何かをつくらんとする分は諦まっていますし、建築家の仲間がいたこと、菅原みき子さんやその仲間のおかげでこの敷地に選んでいってもらった、希少な体験だったと思います」と菅原氏は言う。

菅原氏は、「みんなの家」をつくるにあたり、住民の中でリーディングシップを取ってきた人物だ。5カ月に及ぶ避難生活から仮設住宅に移したものの、お客さんを迎え入れる空間がそこにはなかった。また震災以降、共に生活してきた仲間が別々の仮設に離散してしまい「寂しい」という声も上がっていたのだという。「散歩がてらにばつときて、お茶をのみながら話ができる場所」を必要としていた。そして、伊東氏らと出会うことになる。当初は目らぐ仮設住宅の敷地での建設も検討していたが、他の仮設住宅からもアクセスしやすい現在の場所を選んだ。

「みんなの家でやったことは、住民の方がたは家をすくい上げてかたちを落とし込んでいくことでした。それは、ヒロイックなまでの建築のあり方とは違い、そこで言われていることを増幅してかたちにしていくことにクリエイティブイティがあるのだと思います。建築家がやるべきことが変わってきたというのが、みんなの家を体験して分かってきたことです」と菅氏は言う。複数の建築家だけでデザインを完成させていくことはもしかしたら難しかったかもしれない。しかし、仲間が介在することが、複数の建築家の個性を創造的に融合したのかもしれない。

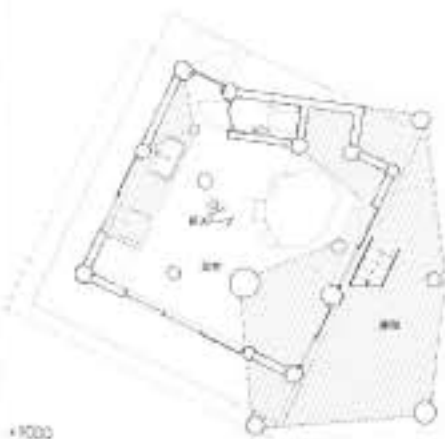
津波を被って立ち上った森林がもったいない」という住民の声を聞き、樹皮材のふま



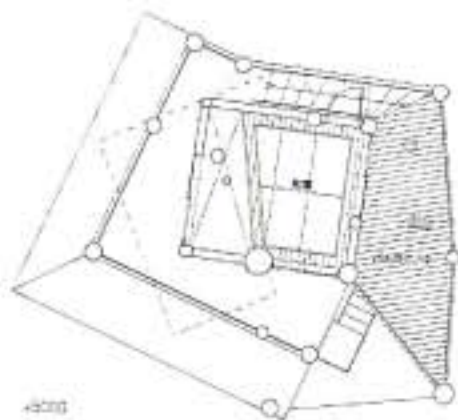
+0200



+0000



+0000



+0200

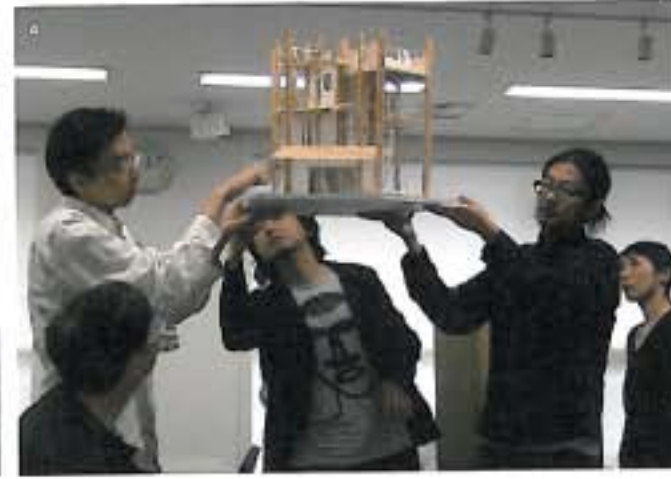


+0000

土/水上がりのある伊豆、木丸を柱として  
も利用。使途に応じてできた丸太の柱は  
、多くの窓枠（白木やコイズム）でま  
込まれている。  
左/右のコーナーより見下す。

9-1-1102





1: 2012年の年末頃、2人の建築家はそれぞれの案を模型にして持ち寄る。2: 嵯峨高田の第2回  
宅を訪ねる。伊藤が音原氏。3: 建築で立ち結内らのもた地元の材産を産。4: 2012年秋頃、建  
築前に深い壁型をもとにスチール。



左ノ原13番ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築  
展日本館「ここは、建物は、可動の」展内部。  
上ノ2012年8月7日、嵯峨高田の「みんなの家」  
上保氏、五から彰、伊藤、早田、藤井、高田の  
ら氏。



6,000の重さの柱。

アプロチキより見る、建物から外部の階段・バルコニーを建設中に物見へつながら。

柱として地元の杉を利用することになった。地  
元有志やボランティアで伐採・皮むきを行った。  
建設のプロセスもまた、「みんな」に関わられたも  
のとなった。

### モノづくりの原点へ

藤本氏は「小さな建物を考えることが地域全  
体を考えることになった」。高田氏の記憶に残る  
過去から未来まで、時間的にも社会的にも「建  
築が」広がっていることを感じ「それは「建築の  
再発見であった」と藤本氏がデザイナーズウィーク  
で行われた受賞報告会で述べた。「音原さんか  
らヒントをもらい表裏にかたちにしていく。場  
所があって、人がいて、建築家が出てくるとでき  
てくる。建築のビジュアルな部分を思い出させてく  
れました」と、建築が生産する原点を語った。

平田氏は、さまざまな複合的要素によって成  
り立つモノづくりに言及する。「科学者に憧れ  
て、人類にとって価値のある何かを発見するこ  
とに意味をずっと感じてきました。建築とは、  
『からまりしる』をつくること。生き物に近い建  
築をつくらうとやってみなければ、どうしても  
これまでは完結したものになってきた。『幾何  
高田では、多様なものがからまりあって共存す  
る状態できないかがあるのではないか』と  
述べた。

### 協働作業の軌跡と進化する空間のゆくえ

約1年間にわたる協働の軌跡は、3月23日ま  
で東京・乃木坂のTOTOギャラリー・間にて「協  
働」そして開催中だ。百数十個にも及ぶスタ  
ディ模型や図面は、「個」から発せられたアイデ  
アがどのように融合していったか、その過程を  
物語る。高田氏による震災前後の嵯峨高田の家

真からは、風景もまた建築のひとつの担い手で  
あることが感じられる。  
「できるだけ活用すること。みんなが楽しく  
使っていることが寄付をしてくれたら、建築家  
の方への恩返しだと思ってる」と音原氏。つ  
くり手だけではなく、使い手によってもまた空  
間は成熟するのだろうか。そして、3人の建築家  
がつくる今後の建築に、「みんなの家」ほどのよ  
うに影響を与えていくのか、注目である。

共同監理 日本建築学会  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
設計 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)・藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)・藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
共同監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
設計 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
共同監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
設計 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)

共同監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
設計 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
共同監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
設計 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
共同監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
設計 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)  
監理 藤本 隆雄 (北谷設計事務所)



1: 2011年の年末頃、3人の建築家はそれぞれの寓を模型にして持ち寄る。2: 福岡県田の原に住宅地を造る。中央が菅田氏。3: 深窓で足らぬ様になった地元の竹材を撮影。4: 2012年春夏、最終案にたい複製をもとにスタジオ。



五ノ宮10階ヴェネキア・ビエンナーレ国際建築展日本館「ここに」、建築は、司馬か、藤内浩。上/2012年8月7日、建築集団の「みんなの手」上棟式。左から佐、伊藤、平田、藤本、山田の5人。

写真提供：建築家グループ  
写真：佐藤浩